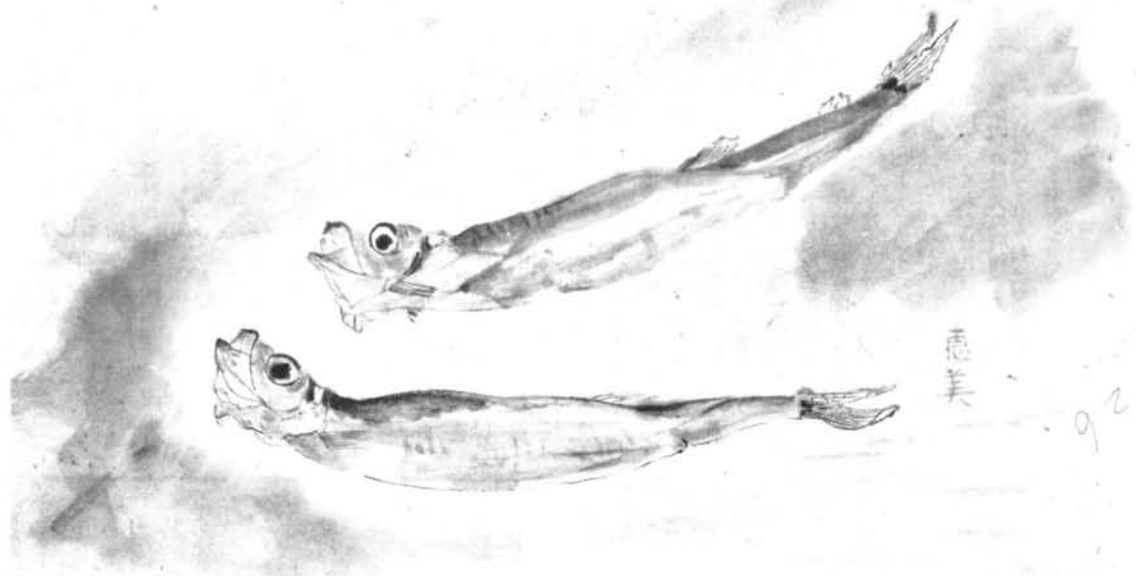


あゐふ

124号

1974・3



もくじ

【テ】原稿】私の地域活動

ガールスカウトリーダーの記……藤浦 だい 2

【こ】んにちは お元気ですか】

——藤浦だいさんの巻—— ……後藤美和子 3

【社】会の窓】

インタビューを受けて ……坂元 礼子 2

ソビエトの婦人労働者(3) ……大城貴代子 4

ある聴講の記録 ……斉藤由美子 6

インドネシアの夫を想って ……荒木李恵子 9

母の写真 ……森 かなえ 9

買物の話(2) ……土屋比佐子 11

主人の入院 ……佐藤 泰子 12

煙よ、さらば! ……高木由利子 14

【リ】レト随筆】

冬の中から ……河本 浩子 10

【文】芸】

ある青春(26) ……津堂 健治 16

【はじめまして】 ……小穴千鶴子 15

【表紙絵の言葉】 ……平田恵美子 15

編集後記

名簿追加分 …… 13

テーマ原稿〔私の地域活動〕

ガールスカウトリーダーの記

枚方市 藤浦 だい



昭和46年10月、ブラウニー指導者講習会に、受講予定の方二人の内一人が駄目になり、ピンチヒッターのような形で、受講する事になりました。

当時、団委員として二年目でしたが、スカウト運動に対しては、まだ手さぐりの状態でした。理解を深めるには、よい機会であろうと思い、楽しく参加させてもらいました。

その為には、四才の次男を、母の許へ預け、二人の子を学校へ送り出した後、府立青少年会館へかけつけるような、有様でしたが、実りある三日間でもありました。

しかし当時、リーダーになるつもりは毛頭なかったのですが、47年3月、若いリーダー二人が同時に、辞められる事になり、急に補充がつかないまま、四月からリーダーとして、活動(?)する事になりました。

全く初めての経験で集会のたびに、とまどいを感じ、スカウト達に何も教えるものを持たない情ない存在でしかありませんでした。勿論、最初から主に事務的な面を担当する事が、条件でしたし、それでよかったのかも知れませんが、リーダーと言うからには、これではいけないと考え、今からでもおそくはない、未知の分野にチャレンジしようと覚悟をきめ集会あるごとに、研修会、講習会に参加し、一歩ずつでも前進するべく努めた。

(つもりであったかも知れない)

しかし、元々リーダーの器でない私はこの一年をふりかえり、一体何をしていたのかと反省し、悩み、悔いる事ばかりであったように思うのです。

ガールスカウト日本連盟大阪府支部結成二十五周年記念式典、甲子園に於ける交通安全のつどい、倉宮、クリスマス会耐寒訓練、B・P祭、その他さまざまに行事の多かった一年を通じ、スカウト達と共に行動して、色々教えられ、私自身の生き方に対する勉強ともなりました。

母親として、自分の子供にだけ向けていた視線を、大勢のスカウト達に平等にそそぐ事のむずかしさ、何事にでもすぐ発言し、行動を起すスカウトは、浮き上り、スポットを浴び勝ちであるが、片隅にいつもひっそりとしているスカウト達にこそ、たえず手を、さしのべねばならぬ事の大切さ、身を以て、これを知る事により、学校、幼稚園の先生方の立場先輩リーダー達の苦勞が多少なりとも理解できたように思うのです。

鈍感な私にとって、この事は、リーダーになってみなければわからなかった、一年間の最大の収穫でありました。

最近、もっぱら読み手になりきってしまったところ、「こんにちは」の相手になってほしいと、小山さんからお電話をいただきました。我ながらいやになるくらい、あまりにも平凡な日常生活なので、「誌面がもつたいないですよ」と、一応お断わりしてみたのですが、何でもいから、といわれるので、お引き受けしてしまい、二月号に紹介していただいた次第です。

約一時間半、私はひとりですき勝手なことをペラ／＼としゃべっていたのですが、出来上りは、あんなにうまくまとめたいて、たいへん恐縮しています。穴があつたら入りたい」とは、こんな時の気持ちをいうのかもしれない。

あの企画を編集部でもたれて以来、いろんな人に当っては、断られることが多いと聞きました。そこで、私の感じたことを少し述べてみたいと思います。

最初にインタビューを受けた方が立派に社会で活躍なさっている、個性豊かな方だったことと、プライバシーをさらけ出すことの不安から、私もあまり

気が進みませんでした。皆さんもたぶん、同じお考えではないかと思えます。その上、限られた時間に、限られた言葉で、自分の考えや生活、信条が、初対面の方にわかっていただけないだろう、という危

惧。小山さんと後藤さんにお会いするまで、私の中にもその心配はつきまといまいました。でも、お目にかかつてはじめて、その心配は無用、と判ったのです。「同じような考えをもっている仲間」という意

識が強く働いて、普段、自分のことをあまりしゃべりたくない私が、なんと自分でもあきれくらいいま／＼と。「同じような考え」とい

うのは、なにも同じ思想、信念という意味だけでなく、「話のわかる人」ということであって、そういう人になかなかめぐりあえないと思

っている私には、たいへんな心強さだったのでしよう。とはいえ、いくらたくさん話してみただけで、考えていることが、全て伝えられるものではありせんし、(特に私の場合、平生の無口の反動から、

いっきに話すぎで、内容が支離滅裂になったりして、途中で、恥ずかしい思いをしなが、でしたから)聞いて下さる方にも、その人なりの受けとり方

があるのは止むを得ないことです。

私は、編集部の方にお会いできて、お話できたことが、とても楽しかったから、別に原稿にしてのせていただかなくてもよろしい、と、あの時申し上げました。インタ

ビューを受ける者とはかく、なされる人の労力は、たいへんなものだわかって

たからです。テープなしで、あれだけうまくまとめられるなんて——と、今ごろにな

って、感心したり、感謝したりしています。

「わいふ」をもっと身近なものに、そして、「話せばわかる」人と話してみたいと思

っておられる方は、辞退などなさらずに、是非お受けになって下さい。

インタビューを受けて

茨木市 坂元 礼子

「こんにちは。」

お元気ですか 4

— 藤浦だいさんの巻 —

「ガールスカウトのリーダーをなさっている人」……おおまかな予備知識を持って、お逢いする。

「はい、私はカトリックの信者です。で、枚方カトリック教会に行っています。その教会の中にできた、ガールスカウトに、長女（現小3）が、ブラウニーとして入団したのと一緒に、私も団委員になったのです」

さりげなく自己紹介。ついで、柔かい光を宿した視線で、正面から聞き手の二人を均等に見やり乍ら……

「ボーイスカウトもガールスカウトもイギリスから、おこったもので、ペーデン・パウエル卿夫妻が、それぞれ始められたと、聞いております。世界連盟ができて50年、日本連盟が生れて、もう確か27年位とっています。大阪府支部の中にも、90団体位が属しているようです」

母体は、教会や寺等の宗教系の所が多く、信者が中心になって、まるっきりの奉仕。

「集団で行なう、屋内、野外でのさまざまなこと、老人ホームの訪問、清掃奉仕、キャンプ、舍営等、主として日曜日が活動日で、スカウト達は、午前中のこともあります。が、私達リーダーは、殆ど毎週が、一日仕事です」

和やかな声で、こともなげにおっしゃるのだけど……

結果、税務署にお務めの御夫君、ボーイスカウトを嫌いな息子さん二人（中一、小一）の、男性トリオは、仲良くお留守番

「三人分のお昼の準備をして出かけることには、していますが、どうしてもできない時つてありますよね。そんな時は仕方ないから、主人に頼んで飛び出してしまふんですよ」

体力、時間、経済面と、かなり高度の奉仕が求められるところから、支部の幹部や各地のリーダーの中には、いきおい独身の、それでいて暮らしの豊かな婦人が多くなる。

そんな中に、立ち混じって、主婦が同じように、大任を果そうとする時、

「主人も、この頃になって、少しブツブツ言ってるようで……」

ニコニコ顔で、家族とのやりとりを打ちあけ乍ら、一方、

「私自身も、時々ま考え込むことが、ありますよ。もう一步ぐという思いでね」

主婦の運命として、奉仕であれ、仕事であれ、家庭外（がくわ）の場で、やりたい事を思いきりやることの、むつかしさを、てらいなく吐き出される。

「入団者の希望は多く、半面、リーダーのなり手は、少なく……」

藤浦リーダーの、存在価値は貴重。

日曜日以外に、月一回は必ず団委員会。頻繁にある、京阪グループの会合、支部連絡会。

種々の募金活動で、街角にも立つ。スカウトの親達への電話連絡も、会費

の徴収も。と、雑務一切、際限がない。

倉庫の掃蕩、事故に遇って、ムチ打ち症状の不快に悩まされた数ヶ月。そんな折にも、「保障制度を考えねば」と、前向きな考えはしても、「いち抜けたあ」とは、ならない藤浦リーダーへの、スカウト達の信頼と思慕は、いや増す。

この頃の親達の中には、学校やガールスカウトなどに、子供を預けっ放して、知らんぷりしている……とまあ、そんな風に感じることは、ありませんか？

「中には、そうした人もいるようですね。道で逢っても挨拶もなさらない人もあるし、親の会への出席、協力も少ないです。

スカウト達も、折角身につけた、思いやり、譲り合いの気持を、日常の暮らしの中には、余り生かし得てないと、いうような氣もします。日頃が大事なことですのに……」

いわずもがなの質問にも、本心からの丁寧な答が、笑顔と一緒に返される。

その笑顔の上に、誠心誠意の人柄が、オーバーラップしてくる感じ。

「子供らと共に学び、成長し乍ら、前向きに生きたい」

奉仕活動の中軸に据え、学習の時、エンジョイの間が、彩よく配分され、主婦の座に忍び込む、沈滞ムードを追払う。

「週の内、べつたり家の中に居る日はめったに、ないんですよ。バタバタで」

市の家庭教育級、婦人学級、成人学級と、つぶさに参加。

美術の講義を聞き、環境問題の勉強にも、熱が入る。

「琵琶湖・淀川の汚染に反対する枚方市民の会」が、成人学級に端を発して、生まれた。

「ピラ配りのお手伝いを少し……」

住民運動への関心も、息吹く。一枚のスナップを見る。

若やいだコーラスグループの一コマ。

「火曜日は、コーラスの練習日、大抵のことには、優先させてあげています」

施設の慰問、よそのグループと交歓。指導者、伴奏者の交代はあっても、年々増えていくレパートリーを、アルトで美しく、快よく歌いつづつて、三年目。

「一番、楽しみにしているのは、毎年五月大阪の三越劇場ホールでの発表会です。お暇がありましたら、今年の発表会にお出かけ下さいませんか」

一瞬、少女のようなはにかみが漂う。

「これからの私が、やりたいなど、思っていることは、主人と共同で、税理士の事務所を開くことです。

若い時に取得した、司法書士の資格に、今少し不慣れの、不動産関係の勉強をやつて、現代に通ずるエキスパートとして、再出発をめざすつもりでいます」

奉仕活動では、信仰を孕む人の謙虚さと一途さ。学習の場では、向上を旨して、ファイト。コーラスでは、愉しい仲間との出会いをよるこぶ純情さ。

「バタバタと忙しい毎日」を送る、主婦と対座していた筈が、いつの間にやらその雰囲気は、かき消えていった。

就中、近き将来、きつて落とされる、新しい仕事へのスタート。

愈、「人生、佳境に入る」の、趣でした。

（後藤美和子記）

ソビエトの婦人労働者 (3)

四、大切にされる子供と老人

母親が安心して働くための保育施設が完備している事は勿論、労働組合の中でも最優先課題として常にとりあつたわれているが、私たちが実に驚いた事は、保育施設にとどまらず、子供の事がきめこまかに施設や制度の中で保護されている事だ。託児所、幼稚園、ピヨニール宮殿、ピヨニールキャンプ、幼稚園の別荘、子供の家(母子家庭の子供を預かる施設)生徒の部屋等々……。

又老人も子供と同じく大切にされ、街々でも雪のつもった公園のベンチに座つてやわらかい日ざしをあびるために老人を沢山みかけることができる。

ソ連邦には、現在四、三〇〇万人の年金者がいる。この年金は、ふつう女性五十五才になれば受給されるが色々年金の移行時期は恩典があり四十五才から受けられる人もいようだ。男性は六〇才となっている。年金額は最低四十五ルーブルとなつており勤務年数によつて差があるが、最低の四十五ルーブルは保障されているようだ。だから年金だけで結構充分生活出来る老人たちがやはり奉仕作業の外、労働力を補う立場から国が施設を考へ再雇用や交替要員等に使つていく。とくにホテルのカギ番や劇場とか観光施設等のオーバーのふだ番号をとる仕事はほとんど老人ばかりといつても過言でない。

那覇市 大城 貴代子

はない。

又国は労働力が不足している部門への就職に力を入れており、一般労働、予防施設、農村教師には年金をそっくりもらいながら賃金を受けるようになっていいる。その他の階層、即ち都市の教師、技師、医師などは年金が半に減額され、さらに事務職の場合は十五%になるといふことだ。

これらの中で幼稚園と老人の家の二つの施設を訪れたのでその内容を述べてみたい。

▽幼稚園を訪れて

(ウクライナ共和国キエフ) キエフの中心地に近い地域の幼稚園を訪れた。

外庭には雪がカチカチに氷り、象や動物のスベリ台、ブランコが寒々と置かれ日本の幼稚園と同じ印象を受ける。入口を入るとやや狭く美しい応接室に案内され、すぐ見学に入る。外は冷下何度という寒さなのに子供達はちようどお昼寝の時間まで下着一枚で一人一人ベッドで寝ていた。私たちの足音で片目をちよつぱり開いている子供もいて、ほんとにどこの子供も同じだといふことを強く感じた。ここは、三才児、四才児、五才児、六才児が約一〇〇人収容できる施設で保母さんはじめ職員は二交替勤務、六時間労働で働いている。

コック、助手、看護婦もちゃんとしており、一週に三回医師は来るようになっており、音楽や体育の指導は専門の教師が週三回来るようになっていいる。

この保育時間は午前七時三〇分から午後七時三〇分迄の十二時間保育となつており、父母が直接あづけにつれてくるし、帰りにも引きとりに来るようになっていいるが、教育方針や母親と保母さんとの接触などかなり徹底しており、ただ子供を預るという事ではなく教育に力を入れていることに非常に驚いた。

私たちは最後に音楽室に案内された。そこにはレーニンのやさしい肖像画が大きくかけられた部屋に可愛い小さなすがきちゃんとお客様用にならべられていた。

そこへ座ると、五、六才の年長児たちが民族衣装で入つてきて花束を私たちに手渡ししながら歓迎のコンサートが始まったのだ。

ウクライナのあの可愛いししゅうのプラウスとスカート、男の子は黒のチョツ

(午前)			
7:30~	8:20	来朝	所食
8:20~	8:45	朝食	の食
9:30分	まで	授業	業食
9:45~			
12:00~			
(午後)			
1:00~	2:00	散歩	歩
2:00~	3:30	昼寝	寝
4:00~		お遊	遊
4:00~	5:00	自由	由
5:00~	6:00	自散	散
6:00~		夕ご	ご
		就寝	寝

キとまるでお人形の様に可愛い子供達は、歌や踊りで一生懸命私達を歓迎してくれたがその踊りの上手なことには驚くと同時にむつかしいダンスをよくもまちがえずに覚えていいることに訓練のきびしさといふか、教育効果に感心した。

この保育料は十二ルーブル五十カペイカとなつており、両親が負担する。参考までに、このカリキュラムをきいてみると上記のとおりである。

▽ハル商業会社(国営会社)

ソビエト滞在最后の日、私たちは市の中心街にあるハルという商業会社(デパートのようなもの)を訪れ、店内の見学や会社の経営、労働組合などについて交流をした。

この会社の入口はモスクワで最も大きいショウウィンドーに日本航空の宣伝と草月流の生花ががざられ、日本の展示会をやつたり、キャンノン・ヤシカ等と実習協定を結んだりしているソ・日集団メンバーに入つていいるという事で、日本のことについてはかなりくわしく知つていいる支配人の話しだった。

建物は大きく二つになつて地下で一つにつながり、売場は二十の店舗からなつて、労働者は五、〇〇〇人が働いていいる。その内九十六%は婦人で三十才以下の若い人が五十三%を占めていいることなどは日本のデパートによく似た労働形態である。週休二日制、八時間労働、一、五交替勤務という労働条件のもとで各々の店舗長は全て婦人である。この二十の店舗の内二つの店舗は若人の結婚のための

品物だけを扱っているらしく、また縫製の工場もあり、四〇〇人が働いている。

この会社の経営をみてみると、一日の総売上は二十の店舗を合計して一二〇万ルーブルになり、年間の利潤一、二〇〇万ルーブル、その内六〇％は国家予算へ、二十％は古くなった商品をバーゲンセールするための欠損、残り二十％が従業員の福利厚生費になる。

さらにこの従業員の福利厚生予算はどのように使われるかというと、今年九カ月の例をみると二三万ルーブルを奨励金やビヨニールキャンプ、割引休息切符の発行、制服支給、社会主義諸国への派遣費用（成績の良い人へ五十％の負担で旅行させ）、健康汽車で（土、日）レクリエーション活動をする費用にしている。

さらに奨励金について、ここではかなりくわしく知る事ができたが、いわゆる社会主義競争の一かんで成績の良い人の写真を廊下の壁などにずらりとかざり、目標達成や、サービスの向上に力を入れている。

まず奨励金は、①一〇〇％の目標を達成した人には賞金十賞金の二十五・三十％増、さらに②一〇〇％を超えたときはオーバーしたものの一％につき賞金の四％増ということで支払われる。即ち一〇八％達成した人は、賞金三十・三十％十八％×四ということで賞金の五十％以上が割増になって給料の手どりということになるわけだ。この割増分は売場の人が全員もらうことになる。さらに店は商品をふん失した場合、〇・一九％の補償をしなけ

ればならないので、これらのために盗難に対する監視の賞金もあり、ここに働いている人々は平均して毎月賞金の二十五％はプラスされたものをもらっている。

ここで、私たち訪問団は、商店での社会主義競争の内、目標達成とはどういうことかということに大きな疑問をもった。沢山売上げた人なのか、サービスの良い人なのか、その辺をきく時間がなくて残念だったが、今会社としては、昔のように物不足でなくなったので、サービスの向上と宣伝の強化をしたいという発言に對し、代表団の中から具体的方法をたずねたところ、この会社では賞金も含めて運営費はわずか二・五％しか使用しておらず、もつと宣伝に力を入れ沢山お客をあつめるために日本を見習うとのことであった。

店内をみた感じは、ちょうど昼前の客の少い時であったが、カメラ、衣類、くつ、おみやげ品などほとんど何でもあるが衣類が高いのにはびっくりしたが、高級品なのかもしれない。

店員は全員制服を着用しており、地下は倉庫、工場への商品の搬入となっており、全て機械化され、ボタン一つで一、二階へ沢山のコート類がハンガーのまま上昇していくのには驚いた。

△休息の家（パンシヨナト）を訪れて
レニングラードより車で約一時間、昨日のレニングラードは雪と小雨の悪天候だったのが、うそのように晴れわたった郊外、そこは白樺、くり、ぐみの木が立ち並び、バルト海、フィンランド湾にも

近いという保養地になっている。そこに「休息の家」というパンシヨナトがここに建っているが、そのパンシヨナトを二カ所訪問した。

パンシヨナトは、労働者が組合から発行される割引切符で休息する施設で、私たちは五階建て二棟七五〇名収容できるパンシヨナトを訪れた。どのパンシヨナトともほぼ同じような施設をもっているようで、図書室、音楽室、食堂、映画室などがあり、部屋はいずれも二人制になっている。施設にはサナトリウムになっている所や親子づれでこれる施設もあるが私たちが訪れたものはサナトリウムも建設予定というところであった。

ここに働いている人は約二〇〇名でその内一五〇名が女性。医師、看護婦もあり、支配人（男性）、棟長さん（二人とも女性）のもとで働いている。ちょうど入所中の人々とも話したが、ソ連邦でも最も北方のウルマンスク市という所からやってきた女性は小柄でよく肥っていたが、実によくしゃべる人で、「自分は戦争に参加しパイロットだったがこの保養所に四十八日滞在しており、帰ると年金受給者になるのだ」と話していたように、ここでは労働組合が発行するチケットが主で、平均十二日間～二十四日間休息している。費用は四十七ルーブルかかるが、およそその割引切符が普通で約十四ルーブルぐらいでいい。又高賞金をもらう人は全額負担をし、賞金の低い人は無料の切符も使用できるシステムになっている。この休息の家は年中満員との事で、冬はスキーを楽しみ、夏は海で泳

ぐというぐあい、食堂も広く、私たちが訪れた時も沢山の人（わりに中年の人が多いかんじ）が食事を楽しんでいる風景をみる事ができた。

△老人の家（俳優さんの老人の家）

レニングラードの中心から車で約二十分離れたところに俳優さん達のために建てられた老人の家があり夜八時すぎに訪問する。この老人のホームは一九〇〇年にホテルブルグにサアービナさん（女性）という女優さんが個人の金で俳優さん達の老後のためにと当時四十人収容の施設を建てたのが始まりで、現在十二棟の建物で三〇〇人を収容している。

この入居条件は、二十年以上劇場で働いた人が年金を受けながら生活しており、今は全ソビエト劇場協会の運営になっている。

費用は全く無料で、国家が一月一人あたり二〇〇ルーブル出して運営され職員は一〇二名も働いており、医師六人、看護婦十一人、掃除婦二人、看護人十二人等となっており、日本のような福祉施設にありがちな人手不足ということは全くなく、入居している人々がかつては舞台の花形という人たちがかりだから、色も白く顔立ちも素晴らしい七十才をすぎているというのに真赤なイヤリングをしているなど、夜のうす暗い電燈の照明とは対照的に表情も明るく、私たちへ自分の部屋をぜひみたくれと強引にひっぱり込む老女が沢山いた。

部屋はそれ程広くはないが、ベット、テーブル等を置いてもこじんまりとした

各個室をもち（夫婦の場合は二部屋）、講堂、図書室、食堂の他談話室があり温室用の蘭がさき乱れ、壁には若かりし頃の想い出の写真があちこちにはられていた。

この中での生活は、ほとんど一日中静かに休んだ生活だそうだが、芸術家ということから回顧録を書いている人、映画のさつえいに協力している人、工場の芸術サークルを指導したりしている人様々で、年金を（三十%しかもらわない）もらいながら、積極的に社会活動に参加して余生を楽しんでいる姿は、何ともうらやましい限りであった。このようにあちこちに色々な職業の人たちの老人の家があり老後は何の心配もなく国家の責任でめんどろをみている制度のようだ。

五、二週間の日程

11月1日 午前11時総評にて結団式
2日 午前11時20分ハバロフスクへ向けて飛行機で出発（2時間）
時差1時間でハバロフスク労働組合評議会の出迎えをうけ
昼食 休けい
午後4時すぎハバロフスクイルクーツク・オーム・スク経由でモスクワへ向け出発
3日 午前 日程打合せ後雪の中を市内見学（赤の広場、クレムリン宮殿、レーニン廟、博物館）
夜9時23分キエフへ出発（夜行列車）
4日 午前9時ウクライナ労働組合

11月5日

評議会の出迎えにより日程打合せ後市内見学
午後 ウクライナ国民経済達成博覧会訪問、夜、ウクライナ文化宮殿コンサート鑑賞
午前10時キエフ・ヤンカー・織維工場見学、午後2時、幼稚園見学、3時、ウクライナ労働組合評議会との交流、夜9時20分モスクワへ向けて帰かん（夜行列車）
6日 午前9時モスクワ到着、昼前よりオスタンキノ肉加工コンビナート訪問
午後4時ソビエト婦人委員会訪問（交流）、夜、バレー見学（白鳥の湖）
7日 革命56周年記念式典参加、午後レレブション
8日 午前11時ゴールキー丘、レーニン博物館見学、ピリオスカで買物（ドル・ショップ 白樺）
9日 朝8時 レニングラード労働組合の方々の出迎え、日程打合せの後市内見学（リコアブリスト広場、ピスカリヨフカ墓地、マルス広場）、午後エルミタージュ博物館見学、夜6時半 老人の家訪問、団の総括会議
10日 朝早目に出発し休息の家訪問、午後3時50分レーニンのかくれ小屋記念館見学、夕方 メトロ見学、夜行列車

ある聴講の記録

でレニングラード発モスクワへ
11日 午前10時30分、全ソ労評との交流、歓迎昼食会、帰国準備
12日 朝 ハル商業会社訪問、買物、夜7時モスクワ出発
13日 昼12時半羽田空港帰国（おわり）

宝塚市 斉藤由美子

以下の小文は、ある大学の「国語表現論」を聴講した、一年間の私のさやかな蓄積である。講師の尾川正二先生は、第一回の大宅壮一ノンフィクション賞を受賞されている。ニューギニア戦線での、忌わしく、惨酷な戦争の記録は、そこで戦かった兵士たちの、それでもなお、人間性を失わずに生きた、すばらしい人間の記録ともなつて、読む私を感動させずにはおかなかった。その本の名は、「極限の中の人間」である。

五十才も半ばの先生は、年よりはすつと老けて見えた。かなり健康を害しておられ、ほとんど白髪にかわつたその頭髮に、「極限の中の人間」として生きぬいてこられた、その人の、その後二十何年間の苦勞を見る思いがした。

大学というところは、夏休み、春休み、試験休みと、一年、五十二週間のうち、その約半分ぐらいいしか、実際には講義はない。時間きっちり教室に現われる先生は、一年を通じて、一度の休講もなさなかった。「国語表現論」は、原稿用紙の使い方はじまつて、国語表記の問題から、「ことばとは何か」という言

語の本質論にまで及び、豊富な授業内容であつた。九十分の授業のうち、五十分が講義、あとの四十分は、その時間に先生の提示される題にしたがつて、学生たちが四百字の原稿用紙を埋めることにあてられた。与えられたテーマに、即座に答えていくというこの作業は、学生にとつては、かなり厳しいものであつたが、限られた時間に、何の予備工作もなく、あるがままの自分を、原稿用紙にぶつけていく行為は、極度の疲勞感の中にもわずかに充ち足りていくものがあつた。私は特に遅筆で、いつも最後のグループに残つてしまふのだが、先生は、いつも最後の一人まで、無言で待つていてくださったのがうれしかった。翌週の時間のはじめは、学生たちの作品の講評があり、一人一人に返される原稿用紙には、朱筆で、誤字、送りなどの誤まりはもちろんのこと、たいいてい三行の批評を記してくださつた。

文章を書くことの難しさと楽しさを教えられたことは、私には大きな収穫であつた。私たちが文章によつて、意識や思考を表現するまでには、ことばの長いつ

らい旅がある。しかし、この書くというプロセスにおいて、意識や思考は、いつも深められる。表現することによって、より真実に近づけるという発見は、一年の聴講を通じて、尾川先生を知ったというのと同時に、貴重なことであった。

最近、尾川正二著「文章表現入門」が創元社から発刊された。文章表現に興味を持たれる方には、一読をおすすめする。その中の、「落穂」と題する章に、多くの学生たちの文にまじって、私の拙文も拾いあげられている。

平和

世界の歴史は、洋の東西を問わず、戦争の歴史である。歴史年表をひもとく時、それはまぎまぎとした現実であることを知る。地球に棲息をはじめた人類が、長い歴史の中で、果して真に平和であった時代があるだろうか。争いと争いとの間の束の間を、平和と呼ぶことはできない。人類はなぜ罪にまみれて、歴史を歩まねばならなかったのだろうか。権力と権力との戦い、主義と主義との争い、傲慢な他民族への侵略——戦争の名のもとに、人間の残したその足跡は、すべて罪悪である。しかし、人間は戦争の渦中にある時、それを正義だと信じ込んでしまう。恐いことだと思う。どのように大義名分を振りかざしても、人間同志生命を奪い合うことは許されるはずがない。

傷ついたベトナムの子らの写真に、心を痛めないものはいない。人間は生来優しさをもっている。それを狂気に変えて

しまうのが戦争なのだ。地球がもはや一つの国になろうとしている今日、貪り合わない平和な世界を、人類の知恵で作り出していけないものだろうか。

わがいのち

菊にむかひて 静かなる

菊造りの名人の手で、その人の魂を得て、華やかに咲き誇る大輪の菊。野辺の道に、ひっそりと群れて咲く野菊の花。菊を愛でるやさしい人たちの庭に、毎年同じ表情で咲く黄や白の花々。いずれの菊も、自然の法則にならって咲きそう。まるでそれは、運命に逆らわず、自身をわきまえて、しかも、いずれの日にかそのいのちの終わることを知っているかのように。あの静けさの中から、菊は何を語ろうとしているのだろうか。霜のはげしい朝、菊は何も語らないまま、土に帰っていく。

人は、美しさを、香りの気高さを求めて菊に向かう。与えるだけの運命に殉じる菊のいのちを想う時、私は私の心の喧噪さと食欲さを省みる。深く内面に生きること、しばし忘れていた自分自身を省みずにはおられない。

菊の花のあの静けさは、私のいのちを静かにかきたてるものがある。

大学

「あなたの専門はなんですか。」外国人に日本語を教えるようになってから、私はいくどこの問いにとまどってきたことだろう。確かに、十九世紀のイギリスの作家を取り上げて、数十ページの卒論を

書き上げ、何とか専門科目の単位も取得した。英文解釈や英会話も、たぶん他学科の人たちよりは、もしかもしれない。しかし私の中には、いつもこの専門ということはへの怖れが存在している。これは在学中にはまったく気のつかないことであつた。研究室の書棚をひっくりかえし、ゼミの発表に追われていたあの頃、私はもう一人前に英文学の学徒気取りであつた。

大学を離れてみて、私と英文学とのつながりが、あの大学の中だけであつたことを発見した。これからの生きていく道程の上で、もし英文書を開くことがあつても、それは慰みの域を出ないのか、そう思うことは残酷なことであつた。大学での学問は、その人が生涯引きずっていく、運命の同伴者として、その人に大きく関わり続けなければならないのではないだろうか。

漫画論

類廃文化の象徴は、漫画本のはんらんなどといわれている。どきつく、グロテスクな表紙絵を、ときどき目にするところがある。「今の大学生には、漱石はもはや古典になった。漫画本を読みなれた者に、あの文学を読みこなすことはできない。」などと世間の目はきびしい。そこまで漫画本に犯されているとは思われないが、若い男性がひとりばつちで、あんなものをニヤニヤしながら読んでいるのかと思うと、背筋が寒くなる。漫画は私にはどうしても、無気力な、そのくせ何もかも他人のせいにして生きている、欲求

不満の若者のイメージと重なるのだ。そして、いったいこういう若者を生み出していく社会は、どうなるのだろうかと思う。類廃文化は、一つの時代の崩壊への前奏曲だといわれる。漫画が一つの文化だなどというのは、馬鹿げた議論だが、未来を夢みることを断たれた若者の、漫画は最後のそれこそ文化なのかもしれない。

人生は一冊の書物に似ている

人生は一冊の書物に似ている。一冊の書物は、序章をもってはじまり、終章で結ばれる。序章が終章に至るためには、作者の主張が、テーマとしてそこに存在しなければならぬ。作者が魂をこめ、愛をこめ、思想や人生観を描き出した一冊の書物には、読む者を深くとらえ、感動させるものがある。それは、作者の人間性そのものの現われだからである。

「人は誰でも、生涯に一度、一つのドラマを書き残すことができる。」という。人の一生は必ずしも、終章を完成させられるとはかぎらない。ぶつんと、その人生が中断することもある。だが、精一杯生きたという証、生涯に一つのテーマを持ちたいと願うのが人の一生であろう。私たちの人生が、自身の主体性で創り上げていくものであるなら、それは命をかけて一冊の書物を書き上げる、作者の態度と同じものであろう。そしてそこに、創る喜びを見出していかれたらと思う。

疎外

現代ほど、疎外ということはが実感されている時代はない。現実はこの社会の

あらゆるところに、疎外は存在している。それは人間の作り出したものである。

近代科学の恩恵に浴するこの文明国で、お互いに理解し合うことを失って、この寒々とした壁を見つめて沈黙する。社会からも、大学からも、隣人からも隔てられたこの壁に、身ぶるいする瞬間がある。これが疎外感である。

しかし、疎外されていると、被害者意識をもつ者自身、他を疎外し、他に対し無関心ではないだろうか。この無関心の深淵に疎外の根源はひそんでいる。

連帯感をもてなくなった人間、現代の疎外に、私はバラバラに生きる人間の悲しさをみる。人間の信頼関係をもう一度編み直し、その上に成り立つ社会を作り出さないかぎり、疎外からお互いにぬけ出す道はない。

忘れられない日

由比ヶ浜の海水浴場のさざめき、八幡様の縁日のにぎわい、それは、私が思い出の中に創作したものだ。あの頃の私は、外を歩くことができなかったのだから。

いつも母の細い首が私の前にあり、白いギプスで動かない小さい右足が、母の腰に押しつけられて、情けなさそうな母の顔がわずかにゆがむ。

今になって、どうしてあの幼い頭で、母の気持が理解できたのだらうと、しばしば思う。心の中に空間があつて、自分ではけして知らないと思っていることが、その空間に、実はびっしりと詰まっているのではないだろうか。

ギプスをはずして初めて歩けた日、あ

の日のうれしきは、私の足が覚えていた。自由に動けた喜び以上に、母も自由になれるのだ、そう感じる喜びのほうがなぜか強かった。私のせいで母が苦痛を負うことは、足の痛みにもまして、私の幼心を重苦しくしていたのだ。

落葉に偲ぶ

学の鉄鎮の重かりしよ

人生を歩む上で、人はさまざまな鎮を引きずって行かねばならない。少年の日を脱した日から、人はこの鎮の存在に気づく。振り返ると、その鎮は意外に長く、重く、けして離れず、私のうしろに厳然とある。

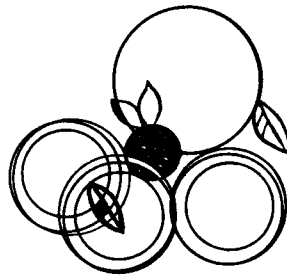
生まれおちた日から、人は実に多くを学びはじめる。あまりに多くを知ったために、深く苦しむことがあったとしても、人はやはり一つでも多く知ったほうが幸せである。そこから自分自身の道を選びとって生きていく。

人間の一生で学びとれることは、ごく僅かなものだという絶望感に、人は少なからず出会ふはずだ。振り返って、学んだことの少なさを知り、学べば学ぶほど、どんなに学んでも学び足りない自分の無力を知る。それでもこの人生に何か真理があるならば、それは学ぶことからしかそこへの道は見出せない。そして人は、学の鉄鎮をがんじがらめに足許に縛りつける。

この鉄鎮が、これからもなお、私のうしろに繋がってくることを知っている。一つの区切りを迎えることに、この鉄鎮が長くなっていることに気づくのだ。生

きれば生きるほど、知れば知るほど、学べば学ぶほど、この鉄鎮は重さを増していくのだろうか。

さまざまな季節を通りすぎて、土に帰っていく落葉、それは一つの生命の終わりの安らぎでもある。鉄鎮をはずして、私もひと休みしたい。しかし明日もまた、この重い鎮を再び引きずって歩く自分を知っている。



魂が語るとき もはや魂は語らない

私たちはつねに、あることを考え、意志し、意欲している。そしてつねに、何かを心に感じている。それらを何らかの手段によって表現したいという運命を背負っている。

ひとり孤島に生きるのではないかぎり、私たちはことを手段として、この社会で生きるのである。

人間は、この世に生を受けた瞬間から、すでに既成のことは辞典を与えられる。それを使うことによって、この社会で人間としての存在を認められる。普遍的なことから、私たちはそれぞれ個別的なことを表現しなければならぬ。人間が社会的な存在である以上、沈黙することは許されない。

しかし、私たちの個性が心に感じたことを、心で表現しようとするならば、沈黙以外にないと思うことがしばしばある。が、現実には、ことは支配され、何か語ろうとすれば、借りものの、ありあわせのことは使ってしまう。その後味の悪さは、誰もが経験しているのではないだろうか。いつそことば以外の手段によって、この全意識を表現できたらと願う。人間の概念よりも、ことは先立ってしまふのは、ことはで生きる人間の宿命だろうか。

しかし一方で、ことばに対して否定的になる自分の内部から、ことはのすばらしさ、ことはから無限に与えられている恩恵への讃美があふれてくる。ことばはやはり優れた伝達の手段である。ことばはなしに、相手に自分の思想を伝え、相手からもそれを得て、自分の内面を豊かにすることはできない。

サルトルのいうことばの内面化は、私にことばに対する認識を改めさせ、ことばはこの現実を自分にとって意味あるものとする、人間と切り離すことのできないものとして、私の中に重く位置づけられている。

インドネシアの夫を想って

半田市 荒木李恵子

南半球のインドネシアへ夫が一・五年の出張ときまった日から、私の胸の中には、今まで思っても見なかった「インドネシア」の6文字が焼きついて離れなかった。

一月十四日、田中首相訪問の際の暴動は、新聞、ラジオ、テレビで毎日の様に騒ぎ立てる。最愛の夫をネシアへ送っている私としては、眠れぬ夜が三日も続いた。国際電話も通じない。唯あちからの連絡を待つしかない。昨日も今日も、ジャカルタ暴動の言葉が私を追いかけて来る。勤めに行くと、皆が「大丈夫？」と聞いてくる。親戚中から電話がジャンジャン鳴り続ける。

十八日ようやく連絡が来て、「会社の中に不穏な空気があるが何事もなかった。日本で騒ぎ立てる程の事はないので安心せよ」と。

ああ良かった。まだ未亡人にはなりたくない。夫にもしもの事があれば、我家は報道陣でごった返すだろう。私の悲しみをよそに、わい／＼騒ぐだろうとの懸念も徒労に終わり、ほっとする。その時、マスコミにおどらされ、「横井事件」「小野田事件」など興味本位で新聞を読み、テレビに見入った自分はずかしいと思つた。TP騒動、洗剤騒動もマスコミにおどらされた庶民が買い占めに走り、ますますその値をつり上げてしまった。で

も誰が、その人達を笑う事が出来よう。

「本当になくなつたら？」の不安から買い占めに走らざるを得なくなつたのだろう。新聞やTVは過大報道をしないではない。倉庫一ぱいかくしてあつた洗剤のことをもっと早く発表する新聞が一つでもあつてほしいものだ。……………」

さて、少しネシアの夫の手紙から抜き書きしてみたい。

ネシア人の生活は大変貧しく常食は第一に米、次にトウモロコシ、第三にいもとなつており、米を食べられる人は、かなり上級の人で、商売人か、軍人か役人か、日本人、中国人である。現地人の中で裕福な人といへば軍人と役人。労働者の賃金は少く、日給RP150、RP300（日本円でRP100＝70円）で、現地の人は大変貧しい暮しである。丁度昭和二十二年頃の日本の生活と思えば良い。昔オランダの植民地であつた為、当時オランダ人からずい分しはられて、現在独立したものの、人間が萎縮してしまつてゐる。

今コレラが流行し、先日モジャカルタで90人の死者が出た。部落の裏街は非常に不衛生なのでびつくりする。現地人はコレラで90人死んでも平氣な顔をしてるのでおどろいた。

暴動の原因は、日本人、中国人に対する現地大学生のにくしみから発する。「日本人は早く帰れ」と叫んでる。これは

日本商品に対する反発、中国人のやつてる商売（キャバレー、映画館）に対する反発。日本の場合ほとんどが合弁会社であるが、日本商社と現地の上流階級との結びつきであり、庶民には少しもあわない。

「日本の技術を早く学んでくれ。そうすれば日本人を帰す」と大臣が説得しているそう。この問題は昨年から騒がれていた事で、最近の物価高に、田中首相訪問が重なり爆発した。

この様な手紙の端々から十分な事はわからないが、自分の国で、外国人が富裕

母の写真

神戸市 森 かなえ

近頃は小学生でも上手に写真をうつす時代となつて我家でも戦後のアルバム数冊が満員となつた。二月のある寒い日私は、アルバム整理を思い立つた。思えば昭和20年3月の神戸空襲で一枚の写真も持ち出す余裕もなく焼けてしまつたので、昔の写真といへば焼けなかつた親類に上げておいたのを返してもらつたのが二、三枚と複写したのが二、三枚あるだけ。

母が亡くなり五十年になる今日複写したのが一枚あるだけで、母のおもかげを見る事が出来る写真のありがたさをつくづく味わつた。母は明治元年生れで明治を生きぬき大正の末期に63才で亡くなつたが、一生を通じて確か三枚位しか写真をうつして貰わなかつたのではないかと思う。明治26年頃新婚當時父と並んで写つてい

な生活をし、いはつてゐるのだから、ネシア人も腹が立つだろう。自国の役人、軍人、それに外国人たる日本人に、こき使われ、生活は少しも楽にならない。そしてその現状をどうする事も出来ない気持ち、あの暴動になつた。日本企業も政府も、考えを新たに海外進出に対処してほしい。

夫は会社命令でネシアへ飛んだのだが、現地の人と心のつき合ひをして、世界人としての日本人たる努力をしてほしいとねがうばかりである。

母が一枚、苦勞の最中に姉妹を奉公に出す時別れのつらさをおさえた写真が一枚、大正時代母の姉妹が三人集つた時に私を入れて四人で写した写真と合計三枚しか私にはおぼえがない。現在手元にある複写の父母の新婚当時のを新しいアルバムに移して母の命日を意義ある日とした。

今後は非常時用の持ち出しに、アルバムも加えねばならないと思つた。今一つ写真は必ず親類に上げて分散させておけば我家で失つてもどこかの親類から返してもらへる方法もあると考えながら、孫達の可愛いスナップ写真、また色々の記念写真を眺めて時の立つのも忘れてい

と、早や夕食の時間となつた。

冬の中から



神戸市 河本 浩子

「デパートのつきあいは、ごめん」という夫に、子供を任せて、家を出ました。実家の母を、電話で引っぱり出し、歩く道すがら、冬の日の、ふと空の一部が薄く破けて、青さの混じった陽射しは、もう一ヶ月も経たない内に来る、春のそれによく似ていて、妙に心優しい気分になせました。

勤めている身の、久しぶりのデパートは、日曜日のせい、ひどい混雑振りで、つき当りそうになる人達の、誰もが、何がしかの荷物を持ち、頬を幾分紅潮させ、暖房も調整してあるだろうに、母もしきりと暑いといって、顔を光らせていました。

催場は、とりわけ、ムンとした人の波で、二人で歩いていると、「タイム・サービス」という貼紙がある一隅に、人が集まっているので、母に聞くと、一日の内、四、五回に区切り、一回一時間程度で、種類の違うものを、安く売り出すので、時々、買ったことがあるとのこと。

私は、普段、そんな時間の買物には、全くといって、程縁がないので、「フリン」といって、興味も手伝い、二時からはじまるという、ハンドバッグの売り出しを見てみたくなりましたが、まだ、10分位は間があると思うのに、段々、女性（特に既婚者らしい）の姿が多くなり、

二時には、まだ何も並べられていないカウンスターが、後から押す人の力で、前の壁につき当る仕末。この時、私にしても、この場所から離れるには、かなりの勇氣（？）を要したと思います。

その直後、店員が、ダンボール箱から、約四箱分のバッグ類を、ザアーツと、カウンスターにあけた瞬間の、異様なとも思える、女性のエネルギー。よく見ると、どれもこれも、到底最近の流行とは思われない、しばらく倉庫の中で眠っていたであろう型の古い、しかも、仕立ても粗悪な、お義理にも、じつくり眺めると、欲しいという気の起らない品であった、

にもか、わらず、唯、安いという故にか、つかみあい、引っぱりあいの様な、状況の中で、時々、店員が、タイミングよく、その内のどれでもいい、ようなひとつを、高々と差上げ、「これはお買得です。品物がい、んですよ。奥さん！」と特定の人につき出すと、当の本人は、二、三秒の躊躇の内に、受取ってしまう。中には、品物を手に取って吟味もせず、「それ貰います」と大声で店員に、告げる者

また、く間に、あらかたのバッグが売れてしまっていた。私はというと、人垣から靴を踏まれて、抜け出すのがせい一杯で、笑っている母の側へゆき、「あ、しんど」といっただけ。でもその日の、

人垣の一人が、別の日の私であったかも知れない。勿論、こんな風景は、誰でも、何度かは、見もし、経験もしているであろうけれど。

デパート、或はスーパーの、「タイム・サービス」なるもの、中には、本当に品物に照らし合わせてみて、安い物もあるだろうが、この日のバッグのような、どう考えてみても、頂けない物もあるはず。しかし、この日のバッグも、カウンスターから消え、いずれ、返品か、廃品になるより、少くとも、現金収入を得た、デパート側の、ほくそ笑みを推し測らずにはいられなかった。

やがて、思ったより早く、糸目がゆるんだり、金具がはずれか、と、「安かったから、仕方ないナ」と修理もせずに、（もともと、買値からみると、修理に出す程の愛着も起らないから）、押入れの中へでも突っ込んでしまおうのではないだろうか。これは、私の過去の経験でもある。たまたま、バッグ一つのことを、取り上げてみたけれど、これと似通った様な人間の買物感覚は、まだまだ、多く周囲に見られるし、その日、出かけてきた時の、心優しい気持も、どこかへふっ飛んで、唯々疲れましたという顔をして家へ帰り、夜、主人に「子供の入学の時の、何とかデスクは、絶対買わないという事にしようネ」と切り出すと、「ウン」といった口先の先から「そやけど、子供が納得するかナ……」と首をかしげるから、

つい語気を荒だてて「納得させるのよ」という調子でしたが、内心「あーあ、この親からして……」と、気が滅入ること。

いずれにしても、昨今の、節約、儉約ムードは、徐々に、日常生活に浸透しはじめるでしょうが、一度、華美な消費時代の洗礼を受けた人間が、この、国民総反発の時期にすら、居直って、モラルを失った、強大、巧妙な商法に、再び、呑み込まれないと、い、切れるでしょうか。紙上では、「立ち上る主婦」とか、「国民春闘」云々の活字には、お目にか、りますが、実際のところ、私自身についていうと、全く何もやっていないし、心の中で、何度腹を立て、いても、その感情を、ただ一つの行動にすら、繋ぐことが出来なければ、その感情は、あくまで感情の段階で、光りを失い、力にはなり得ないと考えます。

主婦だから、やれる、という行動を、自分がまず見つけて、やらなければ。或る人がいました。

「私の罪は、何もしないという罪である。それでいて、罰せられないという罰である」と。

「リレー随筆」の、スターターとしては、全くお粗末きわまりないと思っておりますが、日頃の、自分への警鐘のつもりで書きました。次の方を指名させて頂くのですが、最近、自分の関心がある、童話グループに参加していらつしやる、枚方市の小林つゆのさんに、バトン・タッチしたいと思いますので、よろしく。

買物の話

(2)

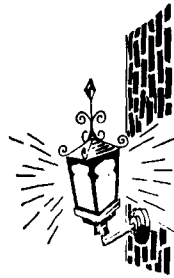
宝塚市 土屋比佐子

パリでは、ちょうど土曜日、日曜日が入り、バカンスの季節に重なってほとんどの店は閉められていた。物価の高いパリでは自然に皆の財布のひももかたくなっていた筈だが、旅のいよいよ最後だということもあって、土産物の数の足りなさに気づいてあわてる人もあった。実は私もその一人であったが、スカーフ一枚が一万円もするとなれば、フアツションの本場で洒落た買物などというわけにはいかなかった。サントノレ通りに並ぶ超一流のオートクチュールのショウウインドウだけをのぞき歩いた。

日曜日の朝、例によってバスは美術館に向かう途中、香水専門店に立ち寄ることを告げられた。二つのグループが二つの店に別れて寄る予定が、どうした手違いか一方の店は閉まったままであった。その結果、二つのグループが一つの店に集中した。その店の表看板には、「リッツ」と日本文字で書かれていた。香水やネッカチーフ、ネクタイを主に置いてある店で、各国に豪華なホテルを経営するリッツの系列に入るのかもしれない。店の中には、フランス人の若い男と日本人

の若い女一人がいた。どつと入ってきた私達を前にして、女店員の一人が香水の種類や香り、値段について説明しはじめた。ろくに香水の予備知識もない者が、わずか十五分の時間で、一つずつ吟味することも出来なくて一体どんな物が選べるのだろうか。要は、パリで買った香水であればいいのである。皆は、数少ない店員めざして殺到した。必死の形相である。私も足りないお土産を姪と組んで香水でカバーすることになっていたので、もみくちゃになりながら、彼女と手分けして、香水とネクタイ一本を買った。バスに乗った時は予定の時間を十分超過していたが、席に着いている者はわずかだった。バスをはじめから下りないでいたO教授が、「もう行きましよう。買物に来たのじやないから。」と怒気を含めていった。それを合図にバスは席をあげたまま、印象派美術館に向けて出た。その日は美術館に着いてすぐに解散となり、それ以後のありあまる時間を皆はおもいおもいに楽しんだのだから、バスがチャーターされたわずかの時間を惜しむようにして、土産物店に寄り、そのわずかの間店は開かれていたのである。確かに、香水は日本で買うより安い。その安くて魅力的な香水を買いたくても、店は開いていないのだから、旅行者に一つの便利さは提供されただろう。しかし、やはりあやつられていてという奇妙さはここに極まった感じであった。バスの中で、私は噴然としたO教授の顔、自分をふくめて、皆のとにかく買おうという必死の表情、まるででんでこ舞いで上気した女店員が、

ひどく日本語的なフランス語で、フランス人の男を呼びつけながら、品物の場所を指していたその顔などをひっくり返して思い出し、おかしさがこみあげてきた。批評家先生が、日本人は、日本人は……と嬉しそうにいう材料をまた一つ提供するだけの足跡を残してきたと思った。



旅に出る前、私はある雑誌で日本人の団体がパリの飛行場に着くと、いくつもの土産物屋の人がやってきていて、そのうちの一人を交通公社の人が選ぶと最敬礼して去り、翌朝ホテルにバスで一行を迎えにくるという記事を読んだ。そんなふうに大挙して土産物を買う人種も他にないという批判をこめて、かなりカリカチュア化して書いてあった。それは確かにそうであった。少なくとも交通公社の御仕着せのプランではない私達の旅行ですらこんなものだから、〇〇バックというような気がする。年々、増える海外旅行者の数の大半を団体が占め、みんなまとめて面倒みて貰うことの中には、お錢別に対するお返し土産買ひも入っているのだ。

一緒に旅をしたカーテンのテキスタイルデザイナーのM子さんは、この旅に出ることを社内放送で公表され、なにがしかの御錢別を買ってきたことも加わって

彼女のノートにはお土産を買わねばならぬ人の名前がびっしりと書きこんであった。その一つずつを消していきながら、「あ、こんど来る時は絶対に、一切お土産は買わないわ!!」と長嘆息したのであった。おまけに、スーツケースを借りようとしたら、ジョニ黒を二本頼まれて、借りるのをやめたともいつていた。外国に出た日本人の多くは、お錢別への義理と舶来好きに苛まれて、各地で買いまくる感をあたえて立ち去るのだろう。スペインでもイタリアでも私達がただ通りすぎるだけでも、土産物屋の店先から、「コンニチワ、アリガトウ、サヨウナラ。」という声が陽気に飛びかっていた。ベニスでは、私達の乗っているバスのすぐ傍で「シェンエン、シェンエンヤスイフクロ。」とわめきちらしながら、皮の袋と日本の千円札一枚を手にした男が、最後は執拗にバスの入口まで入ってきた。トレドからマドリッドに通ずる道路のかたすみでは、ロバの背に陶器をいっぱい積んで売っている陽やけた男がいたがその傍で手伝っていた足の悪い少年は、「品物の値段と「アリガトウ」という言葉のみ明瞭な日本語を話していた。彼等は生活の中から、独特な響きをもった日本語をそれ程の苦もなく、選びとり、身につけてに違いない。

この外国で物を買うということについて、個人の観光旅行者のみならず、商売用として、デパートなどが、スペインの片田舎の小さな店あたりから品物全部を買いとってしまうことがあるという話を聞いたことがある。かなりのがらくたが

入っている、安い値段で買いあげた物には、スペインのアンティークなどという広告をつけて、立派に商品として役立つからだろう。色々考えていると、団体の中の一人の旅行者であれ、なんであれ日本人の外国製品に対する態度はやはり独特で、異国での買物一つをとっても、大げさにいえば民族全体が持ち寄りあっている非常に日本的な現象なのではないかと思えてきた。

パリの街をK夫妻に案内して貰いながら、たまたま日本人旅行者の話におよんだ時、K夫人は、「あんなふうに、どこかと団体で店に行つて土産物を買うのは日本人だけですね」としづい表情でいった。そして彼女がよく行く店などに、買物客のために常備してあった紙袋がある日突然消えてしまっていることがある。偶然にその店が品切れを補充してないだけのことかもしれないけれど、ここにも日本人観光客がきて、紙袋でもなんでも持つていってしまうので、以来その店は紙袋を置かなくなったのではないかと勘ぐってしまうのですとつけ加えた。彼女は、美しいパリの街にやたら目につく汚ないジーン姿の若い人達を半ばうさんくさく眺め、街中で十米も歩けば自分の探しあぐねていた店をいとも簡単に通りすがりの観光客に教えられて面喰らったりしている人だから、かなりクールな目で日本人を眺め批判をこめていきつたのだ。その店に関して、その言葉通り、あるいは彼女の勘ぐりであつたのかもしれない。けれども、私はその

言葉の裏にひそむ彼女の日本人への苦しいおもいの味がすぐわかるような気がした。そしてその味を作り出すものは、案外、無邪気な日本人の田舎くささであつたり、愛すべき人の良さであるかもしれないと思ふ反面、何事にも集団で突走る日本人独特の恐しさでもあるように思つたりした。ただはつきりわかつたことは、その味は単に団体の観光客のみがふりまいて行くのではなく、一人の旅行者も異国に定住している人をも含めた日本人全体が、何らかの形で持つてくる体質からきていることで、きつぱりといふ放つだけでは終わらない性質のものではないかということだつた。

早くも思ひ出となりつつある旅への名残りを惜しみながら、私達は羽田に着いた。ジョニ黒やナポレオンと共に、土産品のどつきりつまつたスーツケースもどつとおろされた。買物上手のF先生のハンドバックの中には、ローマで自分の古びたつづれ織りの財布と交換した真新しい皮の財布も入つていた筈である。税関を無事に通りすぎて私達はお互いに別れの挨拶をしていた。その時、S短大の事務員をしている娘さんが、「出来れば今夜、東京に泊まって、明日アメ横（外国製品を売っている所）に行きたいのだけど。」と誰にともなくいった。そのなんとも心残りだという表情が印象的であつた。

この文を書いて二カ月後、朝日新聞で我が身にしみる記事をみつけた。その抜き書きより。

「ソ連見たまま 一〇月二十六日付 円を振回す日本人客」

この国の外人旅行者は、外貨専門店で購入をする。そこでは必ず日本人と出会う。日本人旅行者はほとんど団体であり外貨専門店は狭いから店内はたちまち日本人で満員となる。まことにそれは、すごい光景だ。先を争つてショー・ケースに群がる。てんでにケースの上から商品指着して叫び声をあげる。中略

都市が変わろうと、店が変わろうと日本人はこれらの品物に殺到する。そして円の札びらをふり回す。おつとりと構えていた仲間の日本人もその熱気にあおられていつしかショー・ケースに突進することになる。あまりのすさまじさのために、青い目の先客たちは引下からざるをえない。やがて潮が引くように日本人が消える。

そんな日本人を見て「買物アニマル」とつぶやく声を聞いた。アメリカ、ヨーロッパの旅行者は同じ外貨専門店でも、毛皮コーナーに多い。銭別をくれたお返しに——という日本人が概して値の安いものを買いあさるのにくらべ、西欧人は高級品一点主義とみえた。

ともあれ、ソ連でも「円」は強い。そして円をもつ日本人は、歓迎されている。たとえ美術館で鑑賞よりも、写真撮影に熱中する行儀の悪い客だとしても——。

終



主人の入院

徳島市

佐藤 泰子

昭和四十八年一月三十日、主人の入院した日である。

顔から足の先まではれて、四十度を越す高熱だつた。

そも／＼暮れのクリスマススイブの夕方お風呂に入つていてフラ／＼ときて、片手足に軽いしびれが来た。か、りつけの医者に電話したが休診で不在、日曜日のイブの事とてタクシーはなく、やっと主人の兄の車でかけつけた近くの病院で診察の結果、軽い脳内出血と診断された。

月曜日、か、りつけの医者に往診してもらつて、注射とのみ薬をもらった。私は入院した方がいいと思つたが、総合病院は暮は二十八日までだし、主人は別にどこが痛むわけでもなし、お正月病院なんていやだし、医者はい入院してもしなくてもどつちでもよろしい。安静に寝て注射と薬を続けていれば、二カ月もすれば元どおりになるでしようという。言葉を信頼して自宅療養をしていた。

毎日往診してもらつて、お正月も十日をすぎるとずつと良くなり、この分だと二月から会社に出られるだろうと喜んでた。会社の方やメーカーの方が、狭い家に次々と見舞にきて下さり、主人の世話と客の接待に気を使ひながらも、主人

の病気が快方に向かつてゆくのをたのしみにしていた。が、一月も二十五日ごろになって熱が出る様になり、医者は風邪だと今までの薬に風邪薬が加わった。

が熱は一向に下らず、三十八度台から四十度を越す様になり、熱さましの頓服をもらった。水でひやしても、七時間おきに四十度を越す高熱が昼となく夜となく続き、医者はリユーマチ熱だという。熱の出る前はものすごい寒気で、ふとんと毛布を何枚もかけてもガタ／＼ふるえて、上からおさえつけておかなければならない状態で、私はこのまゝ家においては主人は死んでしまうかも知れないと、入院させてもらう様に頼んだ。総合病院へ問い合わせてもらったが、どこもベッドは満員で、二、三日待たなくてはとの事。薬で熱が下ると今度はものすごい汗で寝巻はびしょり、身体からゆげが立つ程で毛布まで湿っている。七時間おきにそんな状態のくり返しに、着替えがなくなり私のゆかたを何枚もおろした。

高熱が続く様になって、お腹から大腿部にかけてポツポツと小さな赤い発疹が出て、それがだん／＼と胸から首へと広がり、手足にはれが来た。

ベッドのあく間の二日がどれ程長く思えた事か。

三十日の午後やっとベッドが空き、近くの総合病院は入院する事になった。

その日は長女の三学期はじめての参観日で、お父さんが何時入院するか分らないので行けないかも知れないとはいってあったけれど、一年生の事とて、入口を気にしている姿を思いながら長女にあて

て置手紙を書いた。五才の長男を主人の母に預けて、十二階建の新しい病院の個室に入院しても相変らずの高熱が続き、その夜血圧がひどく下り爪の色が変つて、夜中の一時すぎから点滴がはじまった。

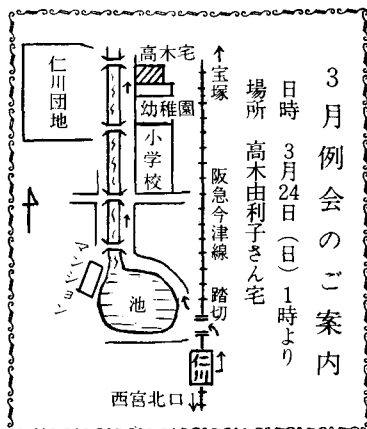
翌日主治医の診察の結果、抗生物質による副作用である事がわかり、肝臓、腎臓がおかされていた。絶対安静、面会謝絶。私は夜も殆ど寝ず看病の日が何日か続いた。

今主人に死なれたら、幼い二人の子供をか、えてどうやって生きてゆけばいいんだらうと、よいいな事はかりが頭に浮んだ。入院した翌日、実家の母が家の留守番に来てくれたけれど、五才と七才の幼い子供の事も気にかゝり、宿題は、忘れ物はないかと一日に何度も電話をかけた。そのうちにも主人は尿が出なくなり、主治医も腎臓専門のY先生にかわった。湿疹はだん／＼ひどくなり、身体全体に広がり皮膚科の先生はひどい／＼の連発。顔のはれもひどくなり、それにかさ／＼と湿疹で別人の様になり、新薬の副作用のおそろしさを思い知らされた。(続く)

3 月例会のご案内

日時 3月24日(日) 1時より

場所 高木由利子さん宅



会 員 名 簿 (追加分)

安達日南子 690-35 島根県飯石郡赤来町下南名751の2
板谷美佐子 578 東大阪市岩田町4丁目13-35
植田 英子 579 東大阪市上四条町13の17
上岡 千恵 764 香川県仲多度郡多度津町栄町
瓜生 芳子 910-01 福井市栗森町浜516
梅田 宣子 658 神戸市東灘区本山町野寄717 川重本山団地1627
尾崎 典子 658 神戸市東灘区御影町西平野西松本3の5
松本マンション
門田あさみ 555 大阪市西淀川区姫島1-18-19カマダマンション
香川トシ子 630-02 奈良県生駒市山崎町20-15
北本 柳子 573-01 枚方市藤阪1320長尾病院内 (S10生)
蔵本 利枝 720 福山市御門町3の6の15城南荘
小堀 裕子 630 奈良市南新町5 多田方 (S20生)
白石由紀子 666-01 川西市清和台東2丁目2-43
清水 操子 652 神戸市兵庫区上三条町34平野マンション307号
巢山美智子 663 西宮市枝川町3番118-405
辻 幸子 665 宝塚市山本丸橋4丁目4の105
辻 逸子 581 八尾市東久宝寺2丁目5の21
辻本 文子 665 宝塚市千種3の17の2
成川とし江 680-07 鳥取県八頭郡若桜町若桜

仲條 康子 631 奈良市二名町4150-5中登美団地F7の207
中西 清美 617 長岡京市今里うつくし25の1
西田 洋子 630-02 奈良県生駒市小町413の7
延近 静子 720-22 広島県深安郡神辺町宇平野611
橋川 裕子 572 寝屋川市池田336-3
波多野紀子 569 高槻市牧田町1319富田団地91-401
原 満枝 669-65 兵庫県城崎郡香住町八原486
平山 久子 794-25 愛媛県越智郡弓削町上弓削住宅98(S17生)
松吉 真里 664 伊丹市鴻江字車場10-2鴻池団地2A-508
松原 敦子 736 広島県安芸郡海田町東海田県営住宅4の2
三浦ヒサヨ 590-01 堺市桃山台4丁目7番5
室田久美子 649-63 和歌山市藤田116-19
山本喜久恵 710 倉敷市東富井旭化成アパート3-1014
山口 道代 655 神戸市垂水区狩口台2丁目C30-204
足達 啓子 629-31 京都府竹野郡網野町島津636
浜崎 節子 760 香川県高松市宮脇町2丁目17の24 (S25生)

住所変更

土屋 準子 590 堺市横塚台2丁目38の30
平山 博子 862 熊本市水前寺4丁目52-7

煙よ、さらば！

宝塚市

高木由利子



今から五年前に、わいふ誌上に「たばこのみの弁」という題で原稿を書いたことがあるのですが、それはちょうど、私が大阪のビルの地下二階の倉庫を改造して写植印刷なるものをはじめて間もない頃でした。

自分が経営していく新しい仕事を持ったことに対して、いく分気負いを感じていた私は、仕事場にいる間は、家庭でのもうろうの絆をたち切って、自分の仕事に専念したいと思い、家に帰れば仕事の事はなるべく忘れて夫や子供たちのことに没頭したかったのです。その気持の区切りをつける役割をたばこが果たしてくれていたのです。仕事場でだけたばこをのみ、家には持ち帰らない習慣でした。

ところが途中で、大阪をひきはらい、仕事場と自宅が同じになると、このけじめがいつのまにか無くなってしまつて、家族の前でもどんだんたばこを吸いはじめてしまったのです。煙草をたしなめ夫をはじめ、喘息体質の子供もけむりをいやがつて、反対するのですが、一たん身について悪癖は、ちつとやそつとの御意

見なんぞではやめられないものになつてしまつていました。

煙草の害を説く人には「別に長生きしたいとは思わないし、それでなくても、私は80才ぐらいまで生きるんじゃないかと心配してるんだから……」などと強がり言い続けてきた私が、今年からふつたりたばこをやめてしまったのは、全く自分でも信じられない位です。

たばこは酒とちがつて、百害あつて一利なしと言われているのは誰でも知っているのに相変らず喫煙者が多いのは、麻薬に似た陶酔感がある為でしょうか。私はタバコをのみながら、時々こんな事を考えたものです。

「人間というのはおろかしいなあ。このタバコのけむり、

肺をタールやニコチンで汚し、肺ガンの原因とも、

血管を収縮させるとも言われ、歯の裏をやニでまっ黒にさせる、

この悪魔のようなけむり……。

もしこんなものを人から強制されて

毎日吸わされるのだったらどんなさわざになる事やら。

皆気がいのように抵抗し、反抗するだろう。

ところが、

自分の意志で吸うとなると、喜んでお金まで出して買うのだからおろかしい人間の意志なんて、

とんだまゆつばものだ……と。そして、自分もそのおろかな人間の一人である事をおかしく思ったものです。

出来ることならやめたいとひそかに思ったことも何度ありました。

子供が喘息発作を起して、私のタバコの煙が喘息を誘発したのではないかと自責の念にかられた時とか、自分が風邪をひいて、タバコをのんでもちつともおいしくないし、よけいにのどが痛くてのみたくもないのに、無意識に手がたばこに伸びていく時なんかは本当にやめたいと思つたものです。

でも思うだけでなかなか実行出来ませんでした。私はやっぱり意志薄弱で禁煙なんか出来つこない。それならいっそ、害のことなんかよくよせずに、タバコをのんで気分転換が出来るなどのプラス面だけを考えていこうと思つていました。

※ ※ ※

去年の秋から暮にかけての石油危機の渦中で、トイレットペーパー・小麦粉・洗剤・砂糖・油等々、次々と生活必需品資が店頭から姿を消した時、わいふの皆さんはどのような気持で毎日を過して居られた事でしょう。全く平静でいられた人は稀だったのではないのでしょうか。

私は仕事も忙しい時だったし、買溜めに走り回る時間の余裕もなかったのです。それは出来ませんでした。ただ一つ自分に強い聞かせていた事がありました。終戦後のあの食糧危機の中を、私の両親が必死で私たちを育ててくれたように、かりにどんな最悪の事態になろうと、私も子供たちを守つてやらねばならない。それには私が絶対に健康でなければならぬ。体ささ丈夫であれば何とでも生きてゆけるという事です。ちよつとオーバー

ーかもわかりませんが、日本の石油パニックという緊迫感の中での私のこの決意が、直接の動機ではないにしろ、タバコをやめた一つの伏線となつてゐるのではないかと思います。

直接の動機というのは次のような事でした。

今年の正月二日に、久しぶりで私の八人きょうだい中、六人までが兄の家で顔を揃えました。その時、医者をしているその兄が、タバコをモクモク吸っている弟や、妹である私に、色々タバコの害を一くさりのべた後、

「本当にかしい人間はタバコなんかすわへんぞ」と言つたのです。

この兄は、今までにも顔を合わせる毎に、タバコはやめろやめろと言うのがくせで、私はその度に、ニヤニヤしながら馬耳東風と聞き流していたのに、その時の、その言葉だけは妙に私の胸を貫きました。

それは多分、たばこをのみながらよく心の中で反芻していた「人間というものはおろかしいものだ……云々」のせりふと、兄の「本当にかしい人間は……」という言葉が、ピタッと表裏一体くつき合つて躍り出したからでしょう。

「そうだ、いつまでもおろかしいままである必要はない。かしこくなれるチャンスもあるのだ」と、何か新発見でもしたように。

聖人君子のような顔をして皆に説教を垂れているこの兄も実はヘビースモーカーであつた時代があるのです。私は真面目に、兄の禁煙の動機やら、成功の秘訣

などを尋ねてみました。

兄の場合は、十二指腸潰瘍の手術をして、タバコをやめなければと思ったのに加えて、医師の国家試験に無事合格する様に、タバコをやめて願をかけたのが動機だそうです。

さあ今日から禁煙だという事で、灰皿から何から全部隠してしまったら「何もナイ」という事が一種の強迫観念になって、ノイローゼになりそうで、これは失敗だったとのこと。そこで今度は、封を切ったタバコを家のあちこちに置いておき、苦しくて、本当に死にそうになったら、いつでもこれをのんだらいいんだと自分を安心させ、この作戦で成功。一番苦しいのは三日間、一週間をすぎたらかなり楽になるとのこと。しかし油断は大敵で、もう何年となく吸っていなくてももし気を許して一本吸ってしまったら、すぐ逆もどりです。煙草屋通いはじまるのだそうで、これは肝に銘じておかねばならないという事でした。

とも角、兄の体験を聞いて、同じきようだいである兄にやれて、私にやれない事はないだろうと決心して、その時以来禁煙を実行しています。

全く兄の言う通り、最初の三日間は本当に苦しくて、麻毒中毒の禁断症状を真似て「あー、早くー、タバコー、誰かママを愛してるんだったら早くタバコを買ってきて！」と子供を困らせもしましたが、そんな時長男などは気の毒そうな顔をしながら、

「ぼくら、ママを本当に愛してるから、買って来ないんやで。ハイ、ガム」と口

にガムを押し込んでくれました。

一番困ったのは便秘してしまったこと。朝起きて朝食を食べたあとタバコを一服し、そのタバコが条件反射となって、次に私がする事は毎朝のきまりになっていたのに、その条件が与えられないものだから、三日も四日も便秘してしまったのです。このまま条件を与えないと、永久に便秘したままでは……と本気になって心配したのも、今では滑稽な思い出となりました。

タバコを吸い始めるのは、大体の人は好奇心の旺盛な20才前後がほとんどだと思のですが、私のようにその頃には吸わないで、分別も出来る筈の30才位から吸い始めて、5年もたった今ごろになって必死になってやめる、こんな母親の姿を見て長男は、

「僕は大人になってもタバコは絶対さへんよ」と宣言し、娘達はいえ、これ又「パパみたいにタバコ吸わない人と結婚しよう」などと言っている。子供たちには反面教師の役割を果たしたのかと思うと、このおろかな母親も、何とかすぐわれる思いなのです。

もし今後、私が又タバコを吸いはじめる時は、「大失恋でもして、死にたくなった時」だと信じています。



はじめまして

茨木市松ヶ本町六番一十三号

小穴 千鶴子

雨降ることに囲りが美しく見えます。今日この頃、始めてお便り致します。

私今度坂元礼子さんのご紹介によりまして「わいふ」のお仲間に加えてさせていただきます。

坂元さんとは学校のPTA活動で知り合いお互いに共鳴する所がありまして、三年余りおつき合ひさせて戴いています。ある夕暮お宅を訪れた時「わいふ」のあることを始めてお聞き致し即座に間髪を入れずお仲間入りした次第です。

お手許にある「わいふ」をご親切に甘え八冊余りお貸り致し、胸踊る思いで帰宅致しました。夕食の片づけ後子供の騒々しさは全然耳に入らず夢中で色々な方のお姿やお顔（想像して）を私なりに作って読みました。だいたい目を通しおえたのが11時前、なんと素晴らしい立派な雑誌かと改めて敬服致しました。そしてその充実した気持の反面、即座にお仲間入りをお願いしたことに一種の恐怖感を感じ、私みだいに未熟者で文章らしいことを書いたことがないものが、これから先持続出来るかしら……、又あまりの流れる様な文面に接し、自分の軽率が見ぬかれた様で、気おくれしてしまい、気持ちまで硬くなり、お返事が遅くなりました。これを書くまでは、心に重い負担を感じておりましたが、勇気を出し思い切っ

て拙文でもと思いペンを握った訳です。

10年もの歴史あるこの「わいふ」に、新米ですが、これから先皆さんと色々なことを真剣に考え、人生に対しても、雑草の様にたくましく生きて行きたいと思ひます。

今後とも会員の皆さんよろしくお願ひ致します。

表紙絵の言葉

神戸市 平田 恵美子

ししやも

一日の労働に疲れ、電車を降りた駅前、急にお腹のすいた自分に気付くと言います。駅前通りの道端で、「めざし」を売っている店から流れてくる「めざし」を焼くにおいが、我家への足どりを速めるのでしよう。

近頃は、専ら、買い占めや、物価高の話ばかりで、さかな屋の店からは、「P・C・B汚染の心配なし」の表示も消え、また、耳にもしなくなりました。ほんとに安心して「めざし」を食べべてもいいのでしょうかしら。

表紙絵は、「めざし」ではなく、「ししやも」を代用しました。



ある青春 (26)

大阪市 津堂 健治



八日、此の日、東京行の列車に乗らねば折角の切符も期限切れとなる。乗車賃が惜しいより改めて切符入手の手続きが面倒だから落着かぬが、父は前日と違いくなり食欲をまして、

「もう大丈夫、早く上京せい」と、久しぶりに大声をだす。

「お父さん、では行つてきます」

健治は何日も前に用意した荷物を持って挨拶する。

「早よう行け！」口をとがらす父だが心のうちは淋しそうだ。母は父の看護で見送つてくれたのは弟だけ。

列車が動きだすと弟のホームを走るのに手をあげ応えた。それから、しみじみ考えた。「もう一度学校へ戻れそうだと」。

東京駅に着いたのは神戸を發つて実に二十二時間を経た早曉だが延着だけで、線路上を歩かされず、空襲にも遭わぬのは、むしろ幸運だった。旅の途中、爆撃にあつて傷ついたり、名も知らぬ小駅で当にならぬ列車を待つというケースがよくあるのだ。

「大船」あたりで混みあふ乗客のざわめきが大きく、うと／＼した目つきで夜明け近い沿線を見ると焦土の連続だ。燃え残りの工場の柱がけしすみみたいに頼りなく突きささったのや、焼け出された人達の呆然とした姿、子を背負い髪をふり乱した婦人もみえたが、遙か彼方に輝

くばかりに赤い太陽がせり昇ってくる。これが聖戦を謳歌する我が国の新春風景だろうか。

東京駅から山手線へ——品川で乗換えが便利だが、網棚まで人が眠り便所を特等席とする超満員では、降車は不可能だ。都内交通は此の日、動いていてこれも幸運といえる。昨秋の空襲以来、帝都の空は幾度も蹂躪され、建物・交通路が破壊されるが路線は必死に修理されている。爆撃・不通・補修開通、そして爆撃と「根くらべ」は果しない。

「五反田」から下宿までは私鉄線へ乗つぎだが健治は出口へ出た。朝食を「しのや食堂」で取る為であった。入口の扉を開け、窓際の卓に腰を下す。朝の九時をまわつていたので客は疎らだ。

「今朝は定食だけですけど……」事務的な給仕の声に外食券を一枚渡す。彼女は調理場に消えるが健治の視線は松山とを捜していた。混みあつた時は別だが、いつもは彼女の方から来てくれるのに今日は、そうでない。給仕人の中に

とは居なかつた。交代制の職場だから休憩時かも知れぬが健治の秘かな楽しみが儼なく消えた。実は、そう空腹でもなかつたし、荷物には朝食用の「握り飯」がはいつていたので、出された料理をその儘にした。

午前十時、下宿に着いた。やっと辿り、

ついたという感じがする。ひきずる様に床を敷き、倒れると忽ち寝いつてしまった。夢は見なかつた。眠りという休息で一杯だったから……やがて彼は目を覚ます、空腹が眠りを妨げた。腕時計を確かめると昼は疾く過ぎていた。大あくびで起き、ふとんとをどてらにして、冷たい握り飯を頬ばつたが広い下宿間の只一人味気なきはどうだ。

昨日までの実家で過ごした日々と、あまりにかけはなれた虚しさだ。健治は孤独を好み青年だが、孤独そのものでは遺瀨ない。

独り旅の興もその土地の風情、村落のた、ずまい、池水の琴線のふるえに孤独の喜びを感じる。孤独の中の只それだけでは虚しさが拡がるばかりでないか。

胃の腑が充たされると却つて疲れを覚える。タオルを持ち銭湯に向かう長い静かな行列に出会う。黒い喪のバレード、白いのは先を行く黒衣の婦人が抱く骨箱だけで背後は顔見知りの町内会の人が続く、まるで罪人の様に隊列は悄然と過ぎてゆく。戦局の苛烈さに比例してこうした光景は日一日多くなる。神戸でもいやという程接した「悲の葬列」だ。

母がいつたのに国防婦人会員として一日に七度も此の行進に加つたとか、死を誇示する儀式は遺族の者に幾ばくの慰めになろうけれど、道をゆすつて見送る無縁の群集には敗北感が強調されるばかりだ。行列が遠ざかり人々がまばらになった時、くりつとした目が特長の逸川政雄が近寄つてきた。(つづく)

編集後記

*梅にウグイス、中天にヒバリ。おのおのまだ少し、舌足らずに聞えますが、それでも一生懸命、さえずりを届けてくれます。春なんですね。お元気ですか。
*インタビュ、「こんにちば。お元気ですか」の、第一号に登場して下さった小山節子さんが、ご尽力なさつて、「阪神高速道建設に対する、道路公害、反対運動」の成果が実り、この建設施行は凍結、事実上とりやめの公算が、強くなつた、とのニュースを、新聞で読みました。
*小山さん、よかったですね。ご苦労さま。
*この二年間続けて、「わいふ」の編集を手伝つて参りましたが、この号で、暫らくの間、お休みを頂くことになりました。正直いって、ホツとした気持ちです。
この間の、皆さまからの暖かいご支援、ありがとうございました。
*来月からは、池田市の小山やエ子さん、宝塚市の土屋比佐子さんが、受け持つて下さる予定です。(三、四カ月間)
*テーマ原稿をはじめリレー随筆、社会の窓等への原稿が、引き続き、どしどし送られてくる事を、願っております。よろしくご協力下さい。(後藤記)

毎月一回十日発行

原稿・誌代の送り先

〒665 宝塚市仁川宮西町1の72

「わいふ編集部」

発行人 高木由利子

発行所 わいふ発行所

振替口座番号 神戸19515

印刷所 百合写植印刷有限会社

誌代 一部 百円(送料25円)